



■主な内容

- ・ IAWAアドヴァイザー会議参加記
- ・ 第37回海外交流の会のお知らせ
- ・ 災害と向き合う
 - －中越地震被災地 陽光台仮設住宅地を訪ねて
 - －災害見守りチーム企画「法末復興祈念はつがま」
 - －UIFA JAPON企画シンポジウム『仮設・日本村誕生をめぐる』
- ・ 私らしく働く一地域で 一水辺の活動と防災－
- ・ マレーシアからの便り
- ・ この指とまれ報告「ほっと館」見学会
- ・ 会員の本 『もうひとつの子どもの家（ホーム） 教護院から児童自立支援施設へ』
- ・ 役員会報告



法末 齊の神(どんど焼)に集まった人々(撮影:渡辺)

IAWAアドヴァイザー会議参加記

松川淳子

1. IAWA の任務

IAWA (International Archive of Women in Architecture)は、1985年に、ミルカ・ブリズナコフさんの提唱により、ヴァージニア州立工科大学の建築・都市計画学科と大学図書館のジョイントプログラムとして設立された。その任務は、世界中から女性の建築家、景観デザイナー、デザイナー、建築史家、批評家、都市計画家やその組織等に関する専門的資料を収集、保存、収蔵し、研究者に提供することによって、女性の建築へのかかわりの歴史を検証することにある。IAWAは、建築分野における女性についての歴史的な一次資料が非常に少ないことを重大な欠陥だと認識して、それを埋める資料を収集しているのである。

2. アドヴァイザー会議

IAWA のアドヴァイザーは、「…IAWA の研究や出版や広報を監督し、アーカイヴに対する財政面や仕事面での協力者を発掘・明確化していくことに務めなければならない」ことになっている。アドヴァイザーは、建築家、アーキヴィスト、都市計画家、工業デザイナー、インテリアデザイナーなど、建築に関わる多様な職業の人材から構成され、構成国も現在 10 カ国に近い。

執行委員には、ヴァージニア工科大学の建築学科と付属図書館の教授、助教授があたっている。議決権のあるキャンパス外のアドヴァイザーとして、米国内外の7都市・8人のアドヴァイザーが2004年から2005年を務めた。職責として、大学の建築学科長、都市計画学科長、図書館長、司書、創設者・名誉教授としてのミルカさんも席を占めているから、合計18人、かなりの大会議となる。

3. 日程・検討議題など

アドヴァイザーとして就任してから、初めて参加した2003年の会議、UIFAツールズ大会の日程の中で開かれた2度目の会議を経て、私にとって今回は3度目の会議参加となる。送られてきた議案書には、「これまでの『運営要綱』を『憲章』に変えることについて」、「故シグレット・ラップさんの寄付について」、「新アドヴァイザーの選出」などもあり、緊張感に満ちた会議となった。日程は、かなりハードで、10月28日：各地からアドヴァイザー到着。10月29日：午前；ソーラーハウスとソイルハウスの見学、午後；ワーキングミーティング、夜；ヴァージニア工科大学の院生の発表とミルカさんの家でのポットラックパーティー。10月30日：前年度までのアドヴァイザーによる第20回会議、新アドヴァイザーによる第21回会議、お別れランチ、というもの。



会議風景



資料庫

時差の残るねほけまなこで、弾丸のように飛び交う英語に付き合い、必死で資料をめくり、夜の会合に間に合うように準備をし…というタフさが要求される。これまで代表を務めていたマルシア・フオイエルシュタインさんの異動にともない、「代表者は、キャンパス内の人になるべきだから」とのことで、新しい代表者にドナ・デュネイさんが選出され、マルシアさんは財務担当のテリー・クレメンツさんに代わることになった。欠員にこれまで名誉格だったミルカ・ブリズナコフさんが議決権を持つアドヴァイザーとして選出された。憲章については、デュネイさんを委員長とする特別委員会を検討をかさねることにして、大学図書館の中に新しく増設された IAWA 用の収納スペースの見学ツアーを行い、特別食堂での会食があって、全日程を終了。

4. アーカイヴの重要性

アドヴァイザーとしての年間活動レポートの作成や会議での意思表明など、プレッシャーに感じることも多いけれど、改めて振り返って



お別れランチの後、特別食堂の前で

みると、私の中でもアーカイヴとこの会議に対する重要性の認識と親近感が年々増していることがわかる。メンバーの真剣な討論は、アドヴァイザーであることの責任と

自覚に裏付けられているし、アーカイヴを発展させていきたいという思いに満ちているので激しい討論があっても少しも気持ちが悪くならない。
女性の建築家や都市計画家、関連分野のパイオニアの資料を集め、第一級の資料館として社会の役に立てていきたいという目的は UIFA JAPON も共有している。UIFA の事務局のすみに置かれている吉田文子さんの資料ももう少し陽にあたる企画をしたいと、またしても思うこのごろである。(写真はいずれも松川撮影)

第 37 回海外交流の会のお知らせ

自然とともに生きる一健やかな日々のためにー

講師：西條 一止氏 (新宿鍼灸柔整専門学校 校長)

日時：2006年3月11日(土) 14:00~16:30

会場：講師の先生の学校 大講義室 (新宿区左門町5番地)

会費：1000円、非会員1500円 託児付 託児無料

中越地震被災地、陽光台仮設住宅地域を訪ねて

小川信子

■第16回日本福祉文化学会新潟大会に参加

2005年11月26日(土)～27日(日)新潟県長岡市蓬平温泉「和泉屋」で行なわれた第16回日本福祉文化学会(会長:一番ヶ瀬康子)新潟大会に参加してきました。大会テーマは“がんばろう新潟—災害から学ぶ 地域の絆、家族の絆—”ということで、1日目はリレートークや特別講演、記念シンポジウムで豪雨や地震災害の現場からの報告や復興への道のりが話されました。

大会2日目の27日に、災害ボランティアの活動地域である、陽光台の仮設住宅地域を訪問しました。会場に向かう途中は地滑りの跡が生々しく、山肌があらわになっている所を土裏で止めた細い山道でした。

■陽光台仮設住宅地でのおもてなし

陽光台の集会所で“お茶の間広場”のメンバーが総出で迎えて下さいました。ここは一昨年12月に避難所から移住して来たとのことでした。一冬越したが、これから寒い冬に向かって、防寒設備があまり良くない環境での生活を心配しておられたのですが、この極寒多雪の日々になろうとはその時は考えていなかったでしょう。

会場の設営は、鯉の養殖を仕事にして、大勢のお客様の食事を作っていたという、肝っ玉かあさんが中心となって、食事をしながら両者が向き合って話ができるように、セットしてありました。食事の内容は、色々の具が入ったおむすび、山菜の煮物と漬物、けんちん汁、くだものなど盛沢山のご馳走でした。私達はすっかり恐縮してしまいました。

私の前に座ったのは、小川ミチさんでした。同姓のよしみで、すぐに打ち明けて災害時の話などして下さいました。地震発生時は、取るものも取りあえず、夢中で逃げ出し、皆と一緒に避難所に行ったということでした。今、仮設住宅に移ってから、人心地がついているが、着替えなど取りに行けない状態になっているそうです。

現在の住居は、2部屋と台所、洗面、浴室、便所であり、彼女の3人家族の生活だと、全ての部屋は、寝室として使用するの、昼間は寝具を片付けながら生活している状態です。それでも仮設住宅に移った時は、自分で食事を作れるのがとても嬉しかった。はじめに味噌汁を作って孫に食べさせた時は、“おばあちゃんの味噌汁はおいしい!!”と言ってくれたことで、本当に生きる勇気が湧いたと話されました。「今回、私達が、話し合いの会を設けて、皆さんと話しながら、手作りの食事を作れたことは、何よりも嬉しいことなのです。皆さんのお役に立てるのが何よりのこと」と言われて、何とも感慨深いものがありました。

ぼつぼつと災害の時の様子など話せる状態になっているようですが、今回はレクリエーション活動として彼女達の“嫁と姑の歌”(方言による)を聞き、春の歌を一緒に合唱して楽しい時を持つことができました。私達は一人では生きられない、家族の絆と地域の絆を大切にしなければ、としみじみと話された事が胸に残りました。



陽光台仮設住宅集会場 嫁と姑の歌 (撮影:小川)

■豪雪の被災地を思って

今この記事を書いている時も、刻々と新潟の方面の雪の状況が放映されています。今どうしていらっしゃるか、皆さんの顔が浮かんで来ます。皆様の厳しい現状を思って、健康と安全を祈らずにはられません。

災害見守りチーム企画「法末復興祈念はつがま」

井出幸子

■被災地雪国

1月15日、雪崩の危険が報じられ、案じながらの長岡からの道程は2m近い雪の壁である。その壁をくぐり抜けると、突然そこは法末集落の自然の家「やまびこ」—初釜の会場だった。NPO 日本都市計画家協会・プランニングエイドチームに協力する形でUIFA 災害見守りチームは法末地区の小正月の祝い「斎の神(どんど焼き)」に初釜というイベントを盛り込み企画した。長岡からの道すがら、信濃川にかかる美しい鉄橋(これは必見)、雪をそれぞれに頂く民家のたたずまいは雪国である。妻入り、切妻の細かい木組みは関東北部の民家と比べ密で丈夫そう、鉄板葺きと雪割棟、新雪国住居—1階RC車庫、2.3階木造—、雪に隠れ、地震の爪痕はわかりにくい、途中で仮設住宅群(七日町仮設住宅)を横切った。

■中越震災復興プランニングエイド

プランニングエイドは、昨年の10月から「中越地震により被災した中山間地域の集落特性を生かした再生計画」を掲げ、美しい棚田や古民家が多く残る旧小国町の法末地区を支援対象とし、交流スペースの開設や古民家再生、各種ワークショップ、冬期交流などを含み「お泊まりプロジェクト」と称して、集落の「へんなかセンター」に週末毎に泊まり込み、集落の人々と話し合いを進めてきている。

■冬季交流 1月編 はつがま

小学校の廃校(63年)をコンヴァージョンした宿泊施設 自然の家「やまびこ」は、被災後、悲願の修復を終え、昨年末12/17 リニューアルオープンした。お祝いのイベントが盛大に開かれ、次いで、今回の企画となった。玄關に「鯛梅と水仙」をいけ、食堂のにわかづくりの床には亭主正宗副会長自筆の軸をかけ、常滑の花入れに「つくばねと椿(あけぼの)」、小川会長の香、赤いカーペットを敷き、舞台をセット。雪下ろしが大変なはずなので、お出でくださる集落の人は少ないのではないかと懸念は、始まり30分前には待合いの椅子が埋め尽くされ、サービスが仕切れるか?という不安に変わった。災害見守りチーム、宮本さんの進行のもと、参加者紹介につづき、亭主の模範点前。正面にさらに3人座り、4人でお茶を点てるというにぎやかなサービス。持参の菓子を次々と封を切り、大きな盆に並べ「お召し上がりください」とサービス、「おかわり」を所望され、さらにもう一服、はじめの緊張が徐々ととけ、おしゃべりが行き交い、お礼の挨拶を受け、終わった。「小国の花は椿で床にあるうすピンクの椿と同じ「雪椿」です。ご縁が深いと思う。」「作法はわからないが、皆で“結構なお点前でした”と言おう、と話合ってきた。」「茶碗の焼きの名前?」「おいしいね!」また、翌日松川副会長宛に、里帰りでお茶会に遭遇した方の丁寧なお礼状が届いた。参加者:集落40名強、プランニングエイド18名(内UIFA13名)、長岡造形大3名。



待合のお客様 (撮影:渡辺)

点前座 (撮影:都市計画家協会 伊達氏)

お給仕とお客様 (撮影:中野)

■10年前の阪神・淡路大震災での仮設住宅建設

震災当時、山本氏は、兵庫県都市住宅部住宅建設課に勤務しておられた。

30万人の避難民のために6万戸の住宅の供給が必要との前提条件、その為に3万戸の仮設住宅と3万戸の既存住戸の流用という計画が立てられた。最終的には48,300戸の仮設住宅の建設、既存流用が12,000戸で全体の必要戸数の設定は、ほぼ正しかった

地震発生から1ヶ月後の2月17日に、最初の3,000戸の仮設住宅の発注。その前に、用地の確保、インフラ整備、役所から民間業者への臨機応変でスピーディーな発注業務では、多くの適確な素早い判断と指示、様々な協力団体との調整は不可欠のことだった。

■4年後トルコで発生した大地震に生かされた経験

兵庫県からトルコ国へ、神戸で使用した仮設住宅2,500戸を提供する事が決まり、トルコ側は建設地の確保と、インフラ整備を行い、建設工事もする、というのが両政府の取り決めであった。日本村はトルコ西部サカリア県アダバザール市近郊のアデリエ(Adliye)の仮設住宅団地の中に設けられた。

山本氏は、トルコ側が行うこの建設工事の技術指導の陣頭指揮をとられ、「トルコ国西部地震災害救済国際緊急援助隊専門家チーム」の団長として活動された。日本村誕生のいわば産婆役をされたのだった。



アデリエの仮設住宅配置図
(山本講師提供)

チームは、兵庫県の職員、プレハブ建築協会の人達、荷役会社の人達、他にJICAの職員達、計15人程で構成されていた。

■1ヶ月うなり続けた、山本チームのエンジン

山本チームの仕事は、自衛艦からの初めの500戸の荷降ろしと、仮設住宅団地内のコンテナヤードへの搬送、開梱作業の指導、500戸のうちの54戸についての建設作業の指導、と続く。阪神大震災での豊富な経験を持っておられた山本氏にしても、トルコでのこの災害支援は、外国で行う業務という事で、初めての事も多かった。

興味深かったのは、トルコ政府が示してきた仮設住戸の面積が1戸当り30㎡だったという事である。その為に日本での仮設住宅3戸を繋いで2戸として使用するというケースもあった。独居老人が多かった日本と異なり、子沢山のトルコの家族像が見えてくる。

一つの大きな目的に向かって職場や立場の異なる人達がチームを作り、各自の持てる能力を最大限に発揮して、最高のチームワークで遂行していく現場の話は、臨場感があり感動的だった。山本チームのエンジンは、後発隊の期間も含めて1ヶ月間フル回転を続け、初期の目的を達成された。



アデリエのトルコ・日本村(2000年8月撮影松川)。その後、住人たちによって増改築が行なわれている。

■防災も視野に入れて活動

江東区の街は、ほとんどが埋立地の上に成立し、区を取り囲む隅田川と荒川、東京湾と、内部河川、運河を合わせて34の水辺を持つ。こうした水辺を活かしたいと、2000年から「江東区の水辺に親しむ会」を立ち上げ、活動を行っている。目的は水の魅力をアピールし、地域と共にいい街づくりを行うこと。そして防災である。

阪神淡路大震災(1995年発生)の経験から、国や都は地震等災害時の住民の避難や救援物資の輸送などに舟運の有効性を再認識した。都内各所に防災船着場の整備を開始し、舟運が可能な河川に2003年度末までに、49箇所を設置した。しかし市民は、そうした船着場どころか、身近な川の存在すら知らない。

日銀本店旧館前にある、日本橋川の常磐橋防災船着場もその一つ。ここを中心に日本橋川～小名木川～神田川を巡る舟遊のイベントを2003年から毎年開催し、防災船着場の存在と役割をアピールした。

■水辺の防災ネットワークを調査

この時、潮位のため船底がつかえて船が出せない、橋の下がぐぐれないという経験をし、それが内閣府の都市再生モデル調査に応募するきっかけとなった。防災上安全な街は景観上も美しい街になるという考え方を下地にし、防災船着場は実際に使えるか、水辺沿いには所々歩けるところがあるがネットワークがうまくできているかなど調べた。また、木場公園や清澄庭園など広域避難場所が川に接している。川からの救援物資は、どこから入れるかなどである。結果は「防災対策を考慮した水と緑のネットワーク再生事業」として、国土交通省関東地方整備局河川部に提案した。

この調査では、船を使った避難訓練も行いたかった。しかし調査期間が3ヶ月と短かったので、地域と一緒に防災を考える懇談会の実施にとどめ、現在も続いている。懇談会に参加していた深川観光協会から提案され、昨年3月20日から4月3日まで「お江戸深川さくら祭り」を開催した。これも商店街に隣接する防災船着場を、実際に使ってみようというのが目的だった。

■荒川ロックゲートと水路網の再生に向けて

昨年10月1日には、隅田川と荒川をつなげる荒川ロックゲートという閘門がオープンした。江東地域は工場による地下水の汲み上げなどにより、明治末期と比べひどいところでは4m以上も地盤が下がってしまった。水害防止のためにはこの地域を締め切り、内側の河川の水位を低下させなければならなかった。隅田川側は扇橋閘門という水位調節の仕組みで船が入ることができるようになっていたが、荒川側からの船の出入りは不可能になっていた。

実は昭和5年の荒川放水路完成のときには、この場所に小名木川閘門と小松川閘門があった。当時は一日約1,200隻という船が通ったが、舟運衰退とともに閘門は取り壊されたという歴史を持つ。ここに荒川ロックゲートという閘門ができ、両河川からの内部河川へのアクセスがスムーズになったのである。

国土交通省は、ロックゲートの利用を災害時だけでなく日常の利用も増やしたいと考えている。そのため、我々の会にも協力要請が来た。日本橋から古河、伊勢崎、野田、銚子へと昔作られたせつかくの水のネットワークが、少し復活する。江東区はこれだけの水辺という財産を持つ街であり、船による観光の可能性もある。江東区らしさは川から発想してこそ街の個性を出してゆけると考え活動している。



オープニングセレモニー風景
(撮影：江東区の水辺に親しむ会 小笠原氏)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4

第2押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2006年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

NEWSLETTER BBS一会員のための掲示板—

Eng_Saw_さんの手紙
—マレーシアからの便り—

東由美子

UIFA大会の常連で、日本大会にも参加されたマレーシアのEng Sawさんのことはご存知の方も多いと思います。一昨年暮の南太平洋津波の後、彼女がどうしているか心配して出した手紙の返事が来ました。



Dear Yumiko Higashi,

Greetings from Penang, Malaysia!

Many thanks for your kind thoughts and concern. It's greatly appreciated.

My family and I are fine and safe. The 26/12/2004 Tsunami did affect Penang Island where I live to less extend in comparison to other southern Asian countries because of our geographical position. Malaysia lost about 64 lives. Luckily no tourist is affected because there is a watch tower at the tourists beach belt to warn the tourists to be away from the beach in time.

The whole episode was a horrible experience to South Asia where so many, thousands of lives lost in a sudden disaster—it makes one feels how small are the human beings when the great nature strikes. Precious lives lost what a waste, and other affected suffer what tragic! Seeing things like this, people should love each other more while still can do so!

Love,Eng.

家族も私も無事で元気です。2004年12月26日の津波は私の住むペナン島にも、その地理的条件のために他の南アジアの国々に比較すると少なかったとはいえ、影響を与えました。マレーシアでは約64名の命が奪われました。観光用海岸には見張り塔があって、観光客が避難するのに間に合うよう警告を出せたので、幸いなことに観光客は無事でした。

突然の災害で多くの、何千という命が奪われた南アジア全体にとってはこのエピソードは恐ろしい経験でした。—この事は大きな自然の攻撃に対し、何と人類は小さいかを実感させました。貴重な命が失われなんという浪費、また多くの人々を苦境に落としきれぬという悲劇！この事を考えると、人々はお互いのできる限り愛し合わねばならないと感じます。(訳：東)

役員会報告

第8回 11月24日；IAWA アドバイザー会議参加のを契機に出張規程を整備。「ほっと館」見学は計32名。災害見守りチームの活動報告。第9回 12月12日；プランニングエイド中越（法末）に会員5名が1泊2日で参加した事の報告。1月のUIFA JAPON主催の現地ではつがまの企画、周知、について検討。第10回 1月18日；長岡市小国町法末、自然の家「やまびこ」で行われたつがまの報告。第37回 海外交流の会（3月11日予定）の実施案、自然と共に生きる一健やかな日々のために—の検討。ライト建築アーカイブス入会案内を周知。次回総会は6月17日に開催決定。以上

この指とまれ「ほっと館」見学報告

昨年10月29日、設計者東由美子さんのご案内でグループハウス「ほっと館」を見学させていただいた。緑道に面した「ほっと館」は、コンセプトづくりから完成まで4年余りかけた、江戸川区初のNPO法人による施設。レストラン「ほっとマンマ」と診療所「石橋こどもクリニック」を併設し、地域活動の拠点そして憩いの場としての役割を果たしている。「自分らしく暮らしてつづける」を目標にした室内は、家庭的な雰囲気にあふれていた。(田中厚子)

会員の本 阿部祥子著**『もうひとつの子ども^{ホーム}の家—教護院から児童自立支援施設へ』ドメス出版**

児童をめぐる環境として重要であるにもかかわらず、あまり社会の表にでてくることのない児童自立支援施設の生活と住環境を調査した10年の集大成。全国の施設職員を対象にした調査表調査と、2例の事例調査（北海道家庭学校、岡山県立成徳学校）から成る。明治時代の「感化院」が昭和初期に「教護院」と改称され、1998年に「児童自立支援施設」となったこと、調査時現在全国に57施設あること、夫婦小舎制（6～10名程度の児童と職員である夫婦が生活をともにする形態）が主流であり、現在も施設数の半分近くを占めていることなど、初めて知ることばかりだった。重層的な聞き取りによって、施設の生活が浮き彫りにされている。「ヒト・ココロ・コト・モノ」で成り立つ人の暮らしを見据え、豊かな家（ホーム）を願う著者の一貫した姿勢に心打たれた。2005年度「今和次郎賞」受賞。(田中厚子)

編集後記

古民家再生では、当時の職人の「技」への敬意が省資源につながり、今後の住人の快適性を求める事が省エネルギーと結びつく事を心掛けたいものです。(中野)地震国にありながら、土地の形として力強く存在している民家に打たれる。よいものはよいと言いつづけたい(井出)職業柄、木の表情が気になります。今の季節は毎日変化しています(須永)久しぶりの霜柱、子どもの頃を思い出しました。大雪の被害に胸が痛みます。(田中)震災と豪雪のダブルパンチに果敢に対する法末の人々のたくましさと涙の前に支援とは何かを再考する(渡辺)人との繋がりが災害に向き合う礎であり、その上で技術者としての役割があるのだと、皆さんの姿勢から教えられました。次号の特集は「少子高齢化を考える」の予定です(編集長 石川)

NPO法人
ほっとコミュニティエスがわ

ほっと館

高齢者に必要なのは自由と安心!!『ほっと館』で自分流始めませんか?

“高齢者コミュニティハウス”『ほっと館』は、「まだ、健康だけど一人暮らしは不安、子供に面倒かけたくない、施設より自分らしく暮らしたい。」といったシニアの方々の声にお応えし、運営しています。◎**プライバシーを保ち自分の生活ベースが守れる。**◎**居住者の仲間や地域の人々と一緒に暮らす。**◎**在宅介護・訪問医療との連携がしっかりして安心。**このことを大事にして、高齢者の方が自分流の豊かな暮らしを始められる、新しいタイプの高齢者住宅として注目されています。

【入居の相談・お問合せ】TEL:03-3652-7212